

いう迷いでした。そこで、当時私の卒業論文を指導してくださっていた海老澤衷先生に「どうしたらいいんでしょうか」と相談した記憶があります。で、きっと先生は覚えておられないと思うのですが、そのとき先生がおっしゃったのは、「それはあなたが決めることです」という言葉だったんです。

もしこの言葉だけ聞くと、みなさんは不親切な先生のようにお思いになるかもしれませんが。確かに、私の質問の答えにはなっていませんでした。でも、私の質問そのものが、本当に論文を書くための質問だったのでしょうか？ 私は、議論の方向性についてさえ、どこかに「正解」があると思っていたのでしよう。私はこのとき、「ああ、大学での勉強というのはこういうことなんだな」ということを、遠回しに教わったような気がしました。そして先生の言葉によって、「調べればなんでもわかる」という、どこかに「正解」があるという考え方から吹っ切れたように思いました。つまり、高

校までの歴史の勉強と違って、大学で歴史を勉強するということは、自分自身で史料や論文を集め、分析し、考え、議論を組み立てること、すなわち、論文を「書く」となんだな、と。

実はちょうどこの頃、同じく指導をしてくださっていた瀬野精一郎先生にいただいた『歴史の陥穽』という本にも、「読む歴史と書く歴史」という一章がありまして、「大学における歴史は、いわば歴史を書くことを目的としている」と書かれていたのです。当時の私は、瀬野先生のこの文章を読んでわかったつもりになっていたのですが、実際に海老澤先生に指摘されて初めて、その言葉の意味を実感できたのかもしれない。その意味で、私にとって「歴史学」というものを初めて意識したのは、「書く」という行為を通じてだと言えるでしょう。ただそこでの吹っ切れ方が自己流だったせいか、きちんと勉強すべきところをサボってしまったりしてまだまだ勉強不足なのですが、もしそこで「書く」ことを意識しな

いで勉強を進めていたら今の自分はなかったかもしれません。その意味で、海老澤先生が具体的なアドバイスを下さらなかったのは、実は「自分で考えなさい」という適切なアドバイスだったのだなあと、今では感謝している次第です。

この先になりますと「それにしてお前の書いた論文は少ないな？」といった指摘を受けなくてはならなくなりますので、今後の「私と歴史学」を頑張るということで、私の話はこの辺で終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

## 私と中国史研究

小 幡 みちる

本日は、現在私が携わっております二一世紀COEプログラム「アジア地域文化エシアンシンング研究センター」の活動紹介と、私が中国史研究を志したきっかけ等についてお話ししたいと思います。

まず、二一世紀COEプログラムとは、

文部科学省が「世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援する」ことを目的に平成一四年度から実施したもので、COE (Center of Excellence)、すなわち卓越した研究拠点に対し、重点的に予算を配分するプログラムです。昨年度は「生命科学」「人文科学」等五分野の募集が行われ、一

六三大学四六四件の申請があったなかで、採択されたのは五〇大学一一三件でした。

このCOEに採択されるということは、その分野において国内最高水準の研究・教育基盤を作ることになるわけですから、大学関係者だけでなくマスコミ等の社会的注目も集めました。

早稲田大学では五件の研究・教育プログラムが採択され、そのうち人文科学分野で採択されたのが演劇博物館およびアジア地域文化エンハンシング研究センターです。

本センターは、大学院文学研究科の美術史・日本史・東洋史・考古学・中国文学・日本語日本文化という六専攻から構成され、アジアの地域文化の価値を見直し、そこから

新しいアジア学の枠組みを作り上げることが目的としています。早稲田大学にはもともと津田左右吉先生らの中国古典学の伝統・蓄積がありますが、本センターはそれを継承しつつも、地域文化に焦点をあてることで、二一世紀にふさわしいアジア文化研究を行なうことを目指します。

本センターには研究チームとして八つのプロジェクト研究所が参加していますが、現在私は客員研究助手として、そのうちの長江流域文化研究所の活動に携わっております。実際にどのような活動をしているかといいますと、例えば昨年二月下旬には、長江流域文化研究所の代表で私の指導教授でもある工藤元男教授ほか計四名で、中国四川省の四川大学と湖北省の武漢大学を訪問しました。武漢では、戦国時代中期の楚墓の発掘現場を見学することができました。私の場合、普段はほとんど文献資料のみで中国史研究を行っていますので、このように発掘現場を実体験できたのは非常に有意義な体験だったと思います。

また、本センターでは、四川省をフィールドとした地域文化研究を中心としており、長江流域文化研究所でも以前から遺跡の発掘調査や少数民族の調査等を行っています。中国史研究というと、机に向かって黙々と漢文を読んでいるというイメージがあるかもしれませんが、このように早稲田大学では海外との共同研究にも積極的に取り組んでおりますので、フィールドでの実地研究等様々な研究方法が可能であると思います。

こうしたなかで現在私も研究活動に取り組んでおりますが、そもそも私が中国史に興味をもったきっかけは、実家にあった貝塚茂樹著『古代文明の発見』（中公文庫、一九七四年）です。これは「世界の歴史シリーズ」の第一巻で、古代中国史をあつかったこの巻は、中高生の頃でも理解しやすくおもしろかったことを覚えています。また、高校生の頃に買った本が、今の私の指導教授である工藤元男先生の書かれた『中国古代文明の謎』（光文社文庫、一九八八年、現在は絶版）です。この本は写真も多く、

新しく発掘された資料等も多く扱っていたため、分からないながらもおもしろそうな気がして買ったのですが、まさかその後自分が早稲田大学に入学して工藤先生のご指導を仰ぐことになるとは思っていませんでした。入学後、科目登録の要項を眺めていたときに、先生のお名前を見つけて受講しようと思ったのが、現在に至る直接のきっかけだったと思います。実は、三歳年の離れた私の妹も後から第一文学部に入学し、姉が研究に四苦八苦している姿を見ていたにもかかわらず、同じく東洋史学専修に進級し、しかも同じく工藤先生に卒業論文をご指導頂いて、昨年三月に卒業しました。

先生方にも、姉妹揃って東洋史というのは初めてだとよく言われましたが、中国史研究に興味がある者にとって、早稲田大学の東洋史はそれだけ魅力があるといえるのではないのでしょうか。

私の専門が中国史であるため、話が中国史関係に偏ってしまいましたが、東洋史には他にも様々なご専門の先生方がいらっしゃる

いますので、アジアの歴史に興味をお持ちの方は、ぜひお気軽に東洋史専修室にお立ち寄りいただければと思います。

## 歴史学と社会学

### 中澤 達哉

まず皆さんに知って頂きたいことがあります。今から十数年ほど前の大学一年のとき、私は早稲田にいたのではなく、法政の社会学部におりました。これは皆さんの経歴と大きく異なる点でしょう。早稲田に來たのは大学院からで、そのまま博士課程まで進み、現在、助手を務めています。

今日は、なぜ私が社会学をやめたのか、なぜ社会学から歴史学に専攻を変えるに至ったのか、その過程をお話したいと思っています。これによって、かつて社会学を学んでいた外の者の視点から、歴史を学ぶ意義、とりわけ、早稲田で西洋史を学ぶ意義をお話してみたいと思います。

私が大学に入る一年前の高校三年のとき

が一九八九年でした。この年、世界を揺るがす大変動が東欧で起こりました。何千、何万もの人がデモに参加し、たった半年の間に、東独、ポーランド、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ルーマニア、ブルガリアの社会主義体制が一気に崩壊したのです。ベルリンの壁の崩壊は、今でも記憶に新しく、体制転換の象徴的な出来事でした。当時の私とちょうど同じくらいの世代の若者、とりわけ、大学のサークルや学生組合の若者が、東欧の体制転換の立役者でした。若者が歴史を変える場面を目撃し、私のような日本の若者には考えられないことであり、非常に衝撃を受けました。この驚きが理由で、大学に入学したら東欧の現状分析をしようとして高三の秋に固く決意しました。また、当時、東欧に関する報道でマスメディアを賑わせていたのは法政大学の社会学者でした。私は迷うことなく、翌年、法政の社会学部に進学しました。

しかし、大学に入ってからが問題でした。私は社会学理論と東欧の政治体制論、現地